

麻布地域の人々が取材 編集する地域情報紙



式号棟の建物。写真奥の番号棟とは中庭を囲むように配置されている。



四号館の建物は、平成31(2019)年3月29日、文化庁の登録有形文化財に登録された。

アートな麻布に魅せられて②② 変わらぬ佇まい 和朗フラットのいま

街の景観が大きく変わりつつある麻布台界隈。その中であって再開発の波にのまれず、昭和の旧き良き面影をとどめ、いまなお現役の集合住宅「和朗フラット」(旧飯倉片町六番地)を訪ねた。多くの人に愛され続ける、その魅力を語りたい。

麻布台三丁目、外苑東通りから南側の坂下には、比較的低層のマンションやビルが並ぶ。その奥に、瀟洒な佇まいで異彩を放っているのが和朗フラットだ。木造の賃貸アパートで、昭和10年(1935)から13年にかけて7棟が建てられ、80余年を経て、3つの棟が現存している。スペイン風の白い塗り壁にスレート葺きの屋根、アーチ型の張り出し、木製の窓。生い茂る樹木に包まれた外観は、なんとも異国情緒たっぷり。現在でも、入居希望者が引きも切らないという。

建築主の^{ぶんざぶろう}上田文三郎氏は、建築とは別の業界に生きたサラリーマンだった。洒落者、かつ裕福であったらしい。昭和3年(1928)、アメリカ見学旅行に参加。帰国後、現地で目にしたと思われるコロニアル様式*のエッセンスを散りばめた建物を設計し、自らも住んだ。7棟すべてが建ち並ぶ景観は、さぞ壮麗であったことだろう。以後スペイン村と呼ばれ、麻布の美しい街並みの一つとして数えられている。

和朗フラットで日常を過ごす人たちにお話を伺い、ご好意で撮影を行う機会を得た。「建築の本を見て心惹かれ、入居を申し込みました。」とは30代の男性。収納家具は作り付けなので、アンティークのテーブルや椅子を持ち込み、往時の雰囲気を実現。また、路面に軒を連ねる四号館の雑貨店、ギャラリー、ホームメイドの菓子店の店主も、「15年前からの憧れの場所に、職場をもてたことは大きな喜びです。今も、窓の向こうの風景は変わっていません。ずっとこのままであってほしいです。」「大切に保存され、長い時間の中で愛されてきた建物です。それは、私がギャラリーに展示する作品を選ぶときのコンセプトと重なります。」「ご縁ができたのは1980年代です。路地奥に、あるとは思わない洋館が突然出現する、それが面白くて。」と、それぞれの思いを語る。

“みんなが、和やかに朗らかに暮らすところであるように”との意図でネーミングした上田氏の思いは、確実に受け継がれている。

* 植民地時代の建築・工芸様式。アメリカでは16世紀後半からヨーロッパ各国による植民地化が始まり、イギリスやフランス、スペインなどの建築様式が持ち込まれ、風土や材料と結合して発達した。



- 1 張り出しの趣ある外観は、洋館好きの諸氏を魅了する。
- 2 アルコーブ(くぼみ)奥のブルーの玄関ドアには覗き窓が。
- 3 面によって漆喰壁の表面の仕上げを変えている。
- 4 矢羽根のデザインは日本の伝統文様で、縁起が良いとされる。(4点ともに四号館)



5 四号館内の美しい窓辺。



6 7 式号棟。クラシカルで美しい作り付け家具に満たされた住戸内。変則的に並んだ窓が、建築には素人だった人の設計の面白さを感じさせている。石づくり風のマンツルピースも目を引く。

●敷地内に立ち入り、窓から室内を撮影するなど、マナー違反もあるとの話も伺いました。四号館の三店舗以外は個人住宅です。どうか居住者への配慮もお願いします。

- 取材協力
- 【式号棟】居住者 U氏
 - 【四号館】UGUISU 小村ひかるさん
Gallery SU 山内彩子さん
ひなぎくきつね 森守さん



7

麻布びと

未来へ残したい麻布の声

「江戸消防記念会」第十二代会長・鳶職 芝崎清昭さん (83)



「江戸消防記念会」三百年の歴史を引き継がれ、会をまとめられる重鎮。大変やさしく気さくなお人柄の芝崎清昭会長。

ザ・AZABU No.48「まちのお役だち」で紹介した、麻布消防署に飾られた「第二区六番組の纏」の持ち主であり、「麻布人」3代目として生まれ育ち、若くして、おじいさんの代から続く麻布での鳶職の「地場」を引き継ぎ、早65年目。今も江戸町火消の技と文化を世界に後世に伝えるため活躍されている、芝崎清昭さんをご紹介します。

三百年の歴史をつなぐ「麻布っ子」

生まれも育ちも……「麻布っ子」

慶応3(1867)年、千葉県あかぎの農家に生まれたおじいさんは鳶職に憧れ、遠縁の伯父さんの元へと上京、麻布一本松町(現・麻布十番)に住まれ、「麻布っ子」の歴史が始まる。その後、お父さんが明治39(1906)年に、清昭さんが昭和11(1936)年8月に生まれる。

当時、にぎやかな麻布十番通り・雑式通りぞうしきどおの裏通りや路地が、ちょうど良い遊び場になっていたらしい。

東京市南山国民学校(現・南山小学校)に入学後、戦争のため昭和20(1945)年、3年生の時に栃木県へ学童疎開をし、空襲は経験されなかったが、ある日「東京方面の空が真っ赤に見える」、それが、東京大空襲の日であった。終戦を迎え、麻布に残られたご家族の元に戻られ、港区立城南中学校(現・港区立六本木中学校)を卒業後、都立九段高等学校に入学されたが、3年生になってすぐに、お父さんが49歳の若さで亡くなられた。

芝崎家には、守らなければならない鳶の地場があり、しっかり者のお母さんが頑張られていたが、結局18歳の清昭さんが退学して継がれることになった。もともと鳶職になるつもりは全くなく、お父さんも「弟に継がせる」とおっしゃっていたが、13歳の弟には早すぎた。突然の大変化だったが「数名の鳶の方や、町内の人たちとおふくろに助けられたおかげで乗り越えられた」とおっしゃる。

江戸消防記念会へは44歳で正会員になられ、厳しいしきたりの中を昇格され「第二区の総代」になられた後、副会長に、そして「経歴と人物」が評価されて80歳の時に第12代会長に選ばれ、大活躍されている。

5歳下の弟さんも鳶になられ、妙技の「梯子乗り」がお得意だったが、残念なことに既に他界。「弟が継いでいたら自分は全く違う生き方をしていたでしょう。まさか自分がねえ」としみみおっしゃる。

趣味は「若い頃はボウリング」とのこと。昭和30～40年代に一世を風靡したボウリング。三田ボウルや田町ハイレーン等、近くのボウリング場が次々閉鎖したために「ボールが小さくなってゴルフ」を始められたが、今はひかえられている。

「鳶職」は「現場の華」

建築現場で高い所の工事を専門にされ、梁から梁へと身軽に飛び、その華麗な姿から「現場の華」と称される鳶職。「町場鳶」と「野丁場鳶」に分けられ、町場鳶は地元の木造住宅を、野丁場鳶は東京タワーや大きなビル、マンションの建設等に携わる職人だ。

芝崎家は「町場鳶」として活躍してこられ、お父さんは麻布十番にあった3つの映画館(ザ・AZABU No.48「麻布びと」で紹介。麻布映画劇場、麻布中央劇場、麻布名画座)の建設に協力されたほか、空き地でのサーカス興業時には大きなテントの小屋を仲間に協力して組み立てられた。

清昭さんは地元の木造建築以外に、23区全域や都外からも要請があり、携わる前には「義理」を重んじて必ず挨拶は欠かさず、今でも神奈川県や埼玉県の鳶の方々とも交流が続いている。

また、お父さんは十番稲荷に合祀される前の末広神社が麻布十番大通りと七面坂の南東角にあった頃、西の市には熊手のお店、年の暮れには新年の「わら飾り(ズ縄など)」のお店を出されていた。

「第二区六番組の纏」

江戸時代、火事場では周辺の家屋を壊して延焼を防いでいた。その破壊消防で



「第二区六番組の纏」を中心に芝崎会長と麻布消防署の瀬崎幸吾署長。麻布消防署署長室にて、大歓迎して下さった(署長は少し緊張気味)

活躍したのが「町火消」と呼ばれる鳶たちだ。纏は火事場で町火消の目印となり、士気を高める組の象徴である。町火消の「三番組あ」と「五番組江」が、明治新政府により「市部消防組」の「第二区六番組」に変わった。守備範囲も、現在の麻布十番・西麻布・元麻布・南麻布の各一部を除くほとんどを「地場」として管理し、象徴がこの纏であった。

火事場で纏が使われていたのは、昭和14(1939)年に「警防団」に組織変更されるまでで、芝崎さんは「おふくろが『嫁いでまもなく麻布十番で火事があり、屋根に纏が立っているのを見たけど、それが最後』と言っていたので、昭和初期まででしょう」とおっしゃる。芝崎家で纏を管理されることになり、現在、1本は麻布消防署に、もう1本は六本木天祖神社に預けられている(3ページ参照)。

消防については、昭和23(1948)年に警防団が現在の「消防団」に変わり、鳶以外の者も団員になり、破壊消防とは異なる消火方法に変化するなかで、鳶職が直接関わることはなくなっていった。



江戸消防記念会のある建物には消防博物館もあり、5階には87本に及ぶ各組の纏が陳列されている。

「(一社)江戸消防記念会」第12代会長

この会は、鳶職および町火消、市部消防組の後裔の有志により組織され、第一区から第十一区まで87組、約600名の会員からなる。火消気質である「義理と人情と瘦せ我慢」を信条とし、300年間、大変厳しい仕来りを守ってこられ、平成30(2018)年11月25日に「江戸町火消創設三百年記念式典」が、ザ・プリンスパークタワー東京で盛大に催され、小池都知事ほか各界の名士が招かれ、祝われた。

毎年1月の「東京消防出初式」から始まり、年間15件の定例行事のほか、国内外へ、江戸火消の文化・歴史の紹介や、数多くのイベントで大活躍されている。

昭和32(1957)年6月から始まった鉄骨鳶(野丁場鳶の一種)の技の結晶と言える東京タワーの建設が一本松町のご自宅から見え、「戦後復興の力として、できあがっていくのがとても楽しみでした。東京タワーは良いね」としみみおっしゃる。今も、麻布十番のご自宅からクッキリと見える東京タワーが、芝崎さんの元気の源のように写った。

●取材協力
麻布消防署 第45代署長 消防監 瀬崎幸吾さん
一般社団法人江戸消防記念会 事務局長 須藤晃二さん

●参考資料
『江戸消防』(一社)江戸消防記念会
『麻布地名今昔』平田秀勝(麻布図書館歴史講座 2017.6.24の資料)
『港区麻布地区防災マップ』港区麻布地区総合支所

(取材・文／加生武秀・加生美佐保)



(一社)江戸消防記念会が創設三百年記念に作成された小冊子。タイトル「江戸消防」とサインは小池百合子都知事による。



肩が赤い絆纏は正会員を表し、2本は組頭の証。裾の白筋2本は「第二区」を表す。そして背中に「六番」の文字。「第二区六番組組頭」だと一目で分かる。



六本木の氏神様の井戸が眠りから覚めた！ ～79年前の記録がよみがえる～



鳥居をくぐりすぐ右側にある倉庫。その中には、きらびやかな「宮御輿」と力強い「第二区六番組の纏」。「あれ？この纏は？」……これは2ページの「麻布びと」の纏(ザ・AZABU No.48「まちのお役だち」にも登場)と兄弟。西久保八幡神社に江戸消防記念会会長の芝崎清昭さんが貸与されたものだが、改修工事のために、今年6月から天祖神社が受け継いだとのことで、何とも不思議なご縁。

「品川の沖から龍が夜な夜な御灯明を献じに来た」と伝えられる、ここ龍土町。南北朝時代の至徳元(1384)年、635年前に創建された「龍土神明宮」は「六本木天祖神社」とも呼ばれ、六本木の氏神様として親しまれている。突然、テレビ局から「井戸を掘ってみませんか」との声かけがあり、宮司は神社に残された1枚の銅板に刻まれた記録を心の糧として作業を進めてもらった結果、みごと井戸を掘り当てることができた。都心の敷地877㎡の静かな空間に不思議な魅力に満たされた神社のお話を宮司の青木大明さんに伺った。

氏神様「六本木天祖神社 龍土神明宮」

東京ミッドタウンと国立新美術館に近く、龍土町美術館通りに面し、にぎやかな六本木のイメージからかけ離れた閑静なスポット。三重県の伊勢神宮を総本社とし、はるか「お伊勢さん」までお参りに行かなくても、身近に参拝できるようにと地元で創建された氏神様だ。

天照大御神、伊邪那岐命、伊邪那美命を御祭神とし、さらに七福神の一柱である福祿寿をお祀りされている。

鳥居の右手前に真新しいポンプ付きの井戸が造られた。これが今回の主人公である。

願いが叶った「誰でも使える井戸」

「六本木安全安心憲章」推奨事業所として認証され、地元の防災防災に積極的に取り組まれている天祖神社。青木さんは、東日本大震災をきっかけに被災時の水の大切さを改めて知り「何とかお役に立ちたい」と痛感されていた。

しかし、今では埋められてしまい全く場所が分からない井戸について、神社に保管されている1枚

の銅板に刻まれた「昭和15年の東京の水不足に敷地から突如湧き出した水が地元を救った」という記録を元に、4年前、井戸の復興を試みられ、業者に相談されたところ、「多額の費用をかけても、水脈が見つかるかは分からない」と言われ、断念されるしかなかった。

そこに今回の話が持ち込まれ、予期せぬこととはいえ、青木さんは長年の願いを託された。

平成30(2018)年12月、テレビ局から声かけがあり、日本屈指の井戸職人が「こんな仕事は初めて」と難色を示されたが、今年6月から工事を始め、10回の工事を経て、念願の水が湧き出てきた。7月16日「お披露目の日」となり、テレビ局の撮影が行われ、7月27日午後1時10分から放映された。

町火消が使った手押しポンプの名前を「龍吐水」と呼ぶが、ここ龍土町でまさに、青木さんの願いが実を結び、貯水量が3トン、1,500人分の水が確保できる、15℃の冷たい水。ただし、水質検査の結果は、飲むことはできないとのこと。災害時には飲めない水も必要となるので、これでも大変ありがたい。



「港区みどりの街づくり賞」平成29年度に輝く、天祖神社と「TRI-SEVEN ROPPONGI」が一体となったゾーン。「TRI-SEVEN ROPPONGI」の建設に合わせて、境内整備が共同で行われた結果、「環境への配慮とすぐれた緑化計画で緑を維持している」ということで授与された。



鳥居の正面には、昭和32(1957)年に神明造で建てられた「御社殿」が見える。右手前には、「龍土神明宮 天祖神社」と刻まれた「社号碑」が建っている。これは、昭和62(1987)年に「宮御輿新調記念碑」として近所のテレビ局から奉納された。



←御社殿の左側に入ると「心願成就の龍灯籠」



↑「擬宝珠」の上部には龍の爪跡がクッキリ。純真な気持ちで灯籠内の宝珠にタッチすると「願いが叶う」とのこと、若者に人気。



六角形の灯籠の各面に、四角・月・丸(太陽)・ハート・スベードの形がくり抜かれ、ロマンチックでかわいいうち折衷。支柱のレリーフには、「鯉の滝登り」の面と「飛龍」の面があり、合わせると「鯉が滝を登って龍になった」というデザイン。



鳥居の右手前。復元された井戸に真新しい手押しポンプが付けられた。



井戸の後ろの石垣に取り付けられた説明書。



説明書の元になった銅板で、昭和15(1940)年の水不足の時、突如湧き出し大活躍した井戸のことが記されている。青木さんの心の支えとなった大切な一枚。



青木宮司の純粋な願いが実を結んだ。

もうすぐ「港七福神めぐり」

石段を登って右側にある「満腹稲荷神社」。思わず微笑んでしまうこの名前、以前は「孫太郎稲荷神社」と称されていたが、近隣の稲荷神社を合祀して、こう呼ばれるようになった。祠の中には「福祿寿」が祀られ、このお姿を普段は拝観できないが、正月三が日だけ、御社殿で祀られ、参拝客に公開される。「福祿寿の御朱印」は毎年元旦から成人の日にかけて催される「港七福神めぐり」の間のみ授与され、令和2(2020)年は1月1日から1月13日までとなっているのでお楽しみに。なお、「天祖神社の御朱印」は、この期間と毎月辰の日に授与されるのでお間違いのないように。



境内の所々に「七」の字の刻印がある。住所の7丁目7-7にちなんで縁起よく「スリーセブン」として親しまれている。マンホールの蓋にも「スリーセブン」。

「六本木天祖神社 龍土神明宮」
住所/港区六本木7丁目7-7 電話/03-3408-5898

●取材協力
六本木天祖神社 龍土神明宮
宮司 青木大明さん、出仕 小野裕徳さん
●参考資料
『港区みどりの街づくり賞 平成29年度 受賞施設』港区環境リサイクル支援部 環境課

(取材/加生武秀、加生美佐保 文/加生美佐保)



台風15号、19号と続き、水害による被災が報道されている。港区は幸いにして難を逃れたが、「防災行政無線」やテレビで流された「レベル」について、覚えておかれてはいかがだろうか。洪水・大雨・土砂災害・高潮に対して、避難のタイミングを表した「警戒レベル」を解説すると、

レベル5	港区から発令	災害が発生したので命を守るためにできる最善の行動をしてください。
レベル4	港区から発令	早く全員が避難先へ逃げてください。行くのが危なければ、近くや自宅の安全な場所に逃げてください。
レベル3	港区から発令	お年寄りや障害者、乳幼児ならびにその支援者は早く逃げて、その他の人は逃げる準備や逃げ始めてください。
レベル2	気象庁から発表	どのように逃げたらよいかを具体的に確認しておきましょう。
レベル1	気象庁から発表	災害=いざという時に対する心構えをし、最新情報をチェックしましょう。

10月に各戸に配布された「港区浸水ハザードマップ」を要チェック。



御社殿の右手前にある「手水舎」。水盤の上には、天井に描かれた龍が降りてきたような、躍動感に満ちた龍が水を吐き出している。この青銅製の龍は、昭和32(1957)年の御社殿造営時に携わられた大工さんのお子息が、神社のためにと京都に特注された奉納品。



天井に描かれた勇ましい姿の龍。石造りの水盤は弘化3(1846)年に造られ、関東大震災と大空襲にも耐えたすぐれもの。今でも立派なお役目を果たしている。

みなさんとともに・・・

ザ・AZABU、50



平成18(2006)年、港区麻布地区総合支所の設置と同じ年に誕生した13年あまりにわたって、年4回の発行を重ねてきた、それぞれの「顔」と

創刊準備号(Vol.00)



創刊号(Vol.1)



Vol.2



Vol.3



現在のロゴのルーツは3号から!

地域情報…「誌」?「紙」?

『ザ・AZABU』は、区の政策で、麻布地区の「地域情報誌」として発行されています。ただし、3号から、「地域のフリーペーパー」を目指し、「麻布地域情報紙」を名乗るようになり

ました。その後、6号から、現在の「麻布地区の人々が取材・編集する地域情報紙」に。



麻布地域情報紙



Start!

Vol.19



少なめ4ページ

Vol.18



「Web限定版」?? …印刷できなかった『ザ・AZABU』

2011年3月22日発行の予定でほぼ完成していた17号。直前の3月11日に発生した東日本大震災のため、印刷ができなくなりました。

延期して印刷・発行するのではなく、当初の印刷用原稿が、港区のホームページで「Web限定版」として公開。

なお、続く18号・19号は、この震災の影響で、4ページに減らして発行されました。

Vol.17



Vol.16



Vol.20



Vol.21



Vol.22



Vol.23



ロゴの「小さな」変化

おなじみのザ・AZABUのロゴ。24号のものと25号のものとを並べてみました。毎号、色を変えている、●の形に注目。



帯の色も毎号違うのです!

35号までは vol. 36号からは No.

Vol.24



No.41



No.40



No.39



No.38



No.37



No.36



Vol.35



No.42



No.43



No.44



「大使を訪ねて」がこの号は休載。

No.45



No.46



No.47



No.48



No.49



号になりました。

、区民の視点で作る地域情報紙、『ザ・AZABU』。
も呼べる表紙を並べ、すごろくにしてみました。

すごろくのルールは簡単。

□ になったら「2コマすすむ」。

● になったら「1回休み」。

読みながら、ゆっくり、『ザ・AZABU』の
「過去から今」を楽しんでください！

保存版！
表紙で楽しむ
『ザ・AZABU』



「麻布の世界から」
というコーナー名の頭に
「大使を訪ねて」を追加。

座長お気に入りの
表紙レイアウト。



麻布「未来への」軌跡

創刊当初から続いている「麻布の軌跡」。このコーナー、12号だけアレンジされたことがあります。その名も「麻布 未来への軌跡」。歴史を紹介しながら、麻布のまちづくりにスポットを当てた特集でした。



港区麻布地区総合支所だより

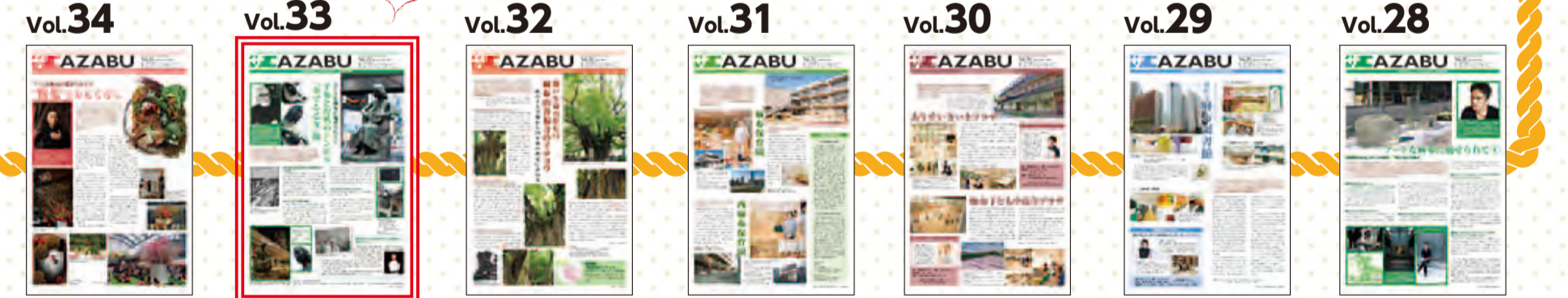
『ザ・AZABU』には毎号、発行元の港区麻布地区総合支所からのお知らせが載っています。26号で「港区麻布地区総合支所だより」のページデザインがリニューアルし、現在に続く『ザ・AZABU』のデザインがほぼ確立しました。毎号のタイムリーなお知らせも、時間が経つと、麻布地区の歴史を紐解く貴重な記録です。

Before

After



「ザ・AZABUのできるまで」
を特集。



Goal!



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

11 住み続けられるまちづくりを

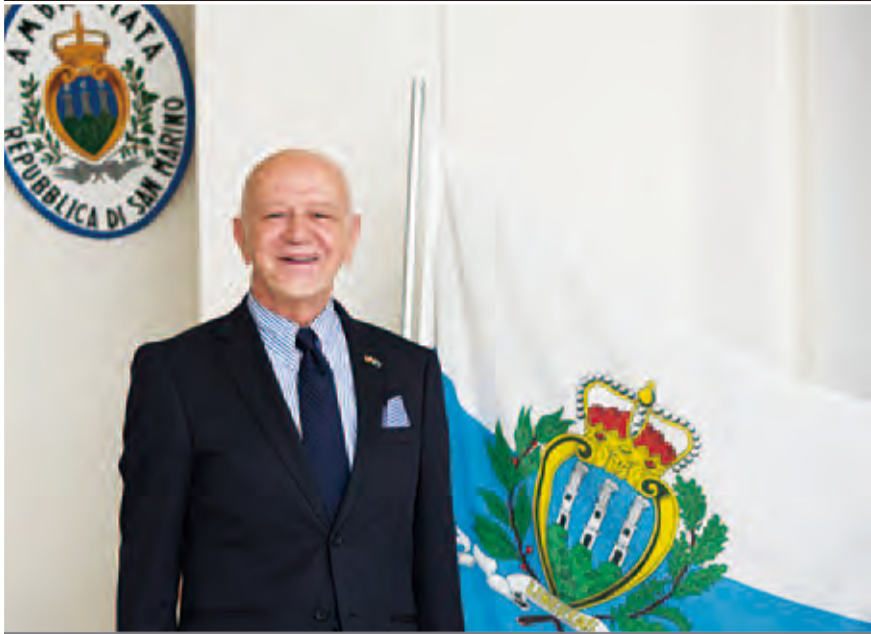
17 パートナースHIPで目標を達成しよう

編集員の皆様と読者の皆様のおかげで、『ザ・AZABU』も第50号を迎えることができました。ありがとうございます。今後も『ザ・AZABU』を通じて、地域の輪がますます広がっていくことを期待しています。

●有賀謙二・港区麻布地区総合支所長

読者のみなさんと、これからも一緒に歩んでいきます！

●カシヨウ タケヒデ・区民参画組織「麻布を語る会」地域情報の発信分科会座長



サンマリノ共和国
 面積:61.2平方キロメートル(世田谷区とほぼ同じ広さ)
 人口:33,121人(2016年8月)
 首都:サンマリノ市
 言語:イタリア語
 元首:執政2名。6カ月毎に互選。
 議会:大評議会のみの一院制。定数は60名。

外務省ホームページに加筆
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sanmarino_r/index.html

駐日外交団長/特命全権大使
 マンリオ・カデロ



元麻布3丁目にある大使館は白い壁に青い窓枠が美しい一軒家。白は純粋、青は自由を表す国旗と相まって晴やかな佇まいをみせている。

取材協力/写真提供
 サンマリノ共和国大使館

大使を訪ねて
 麻布の"世界"から



San Marino

シックなネイブスーツを精悍に着こなすマンリオ・カデロ大使は、イタリアのシエナに生まれ、パリのソルボンヌ大学へ留学し、フランス語もお上手で日本語を含めた7カ国語を話される。駐日外交団長に就任されてからの多忙な日々のなか、貴重なお時間をいただいた我々取材陣を、喜色満面の笑顔で迎えてくださった。



大使はジャーナリストを志し、ソルボンヌ大学で言葉の起源をたどる語源学(L'étymologie)を専攻された。語源学とは、例えば、「OK」という言葉のルーツには諸説あるが、英語の軍隊用語で「zero killed」といい、戦いから戻り「OK」という「誰も死んでいない」、無事に戻ったという有力な一説がある、と教えてくださった。

初代特命全権大使として、駐日の大使155名を束ねる外交団長として

マンリオ・カデロ大使は、1975年来日し東京でジャーナリストとして活躍。イタリア中部に位置する国サンマリノで、外交のお仕事に就かれた経緯を楽しそうに話される。

「サンマリノにいる父方の親戚から、マンリオちゃん、日本で名誉総領事をしてくれないかと突然に頼まれました(笑)」と言いますのは、1996年正式に外交関係が開かれるまで、日本には大使館も領事館もありませんでした。当時は、通信社の記者としてイタリアや諸外国に、日本から発信する仕事をしておりました。

サンマリノでは日本の輸入品がとても人気で、国民は日本との外交が本格的に開かれるのを望んでいました」

1989年にはサンマリノ共和国総領事に就任し、領事館が開かれるまでの10年ほどジャーナリストも続けられた。2002年に大使館が開設され日本初代特命全権大使に、2011年には在日155カ国のトップの外交団長に就任。

「外交団長は信任状を捧呈した日が、最も早い大使が順番に就かれる職なのですが、そのことを全く知りませんでした。ある日、外務省から一おめでとうございます。外交団長に任命されました」という知らせが届きまして、大変、驚きました。団長の仕事は

テキストブックも何もありません。歴代の団長がまとめた情報をもとに仕事をいたします。仕事の量は多く、とても大変ですが名誉ある仕事です。大使の代表として、天皇陛下の御誕辰(お誕生日)での祝賀スピーチや、両陛下が外国への訪問の際には、羽田空港までお見送り、お出迎えへ行かせていただきます。また新しく就任した大使から訪問を受けます。そして日本各地で講演活動も行っています」

上皇陛下とのエピソードを『だから日本は世界から尊敬される』(小学館 2014)で綴られる。外交団長として大使のご活躍は枚挙にいとまがない。

サンマリノ共和国と日本の友好

著書『世界が感動する日本の「当たり前」』(小学館 2018)では、日本文化の素晴らしさや日本人の精神性に言及していらっしゃいますが、母国サンマリノはどのような国なのでしょう。

「1718年もの間、軍隊を持たない、平和と自由を重んじる世界最古の共和国で、素晴らしい国です。実は父は、サンマリノのそういう面に憧れていました。国民は明るくのんびりとしたところがあります。政治家は専門ではなく、他に仕事を持っています。任期は6カ月で、議員の中から2名の執政が選ばれます。6カ月毎になった理由は、他の人



サンマリノ共和国に建立されたサンマリノ神社

にも執政になる機会を与えるためと、6カ月ほどでは悪いことをする時間がないでしょう(笑)」

首都サンマリノ市の歴史地区とティターノ山が、2008年世界文化遺産に登録された。2014年6月22日、大使のご尽力と日本サンマリノ友好協会によって、サンマリノに神社が建立されたことを、大使は心から喜んでおられる。

「東日本大震災ではサンマリノの人口に近い数の方が犠牲になり、そのメモリアル神社としての役割もあります。建立以来、毎年6月末にはサンマリノ神社を中心にニッポンまつりが開かれ、日本酒や和食が提供されます。お祭りを通じてサンマリノの人々に、日本の神社への理解が徐々に得られるようになってきました。日本から神社を訪れる宮司が増えていることも、実に嬉しいです」

国産ワインが有名なサンマリノでは、高品質なワインを世界へ輸出している。その中には、神社の隣の畑で収穫された、サンマリノ神社ワインも含まれる。

サンマリノ神社ワイン区内の輸入販売会社から購入出来る。



日常、港区での過ごし方を伺ったところ「時間を見つけては公共施設の25メートルプールで泳いでいます。泳ぐのが大好きで、10メートルの素潜りも得意ですよ。1日の食事はランチとディナーだけをとりま。人と会うことが多い仕事ですから、ほとんど外食です」

大使館から近い六本木のレストランへ足を運ばれることが多いようだ。もちろんサンマリノ産のワインを持参して。

節目の50号という機会にあたって、外交団長の大使よりお話を伺えたことに、深い敬意を持って御礼を申し上げます。言葉の研究から得られた知見をインプットし、日本人の「和の心」を世界へ向けて提言されている大使の魅力をご紹介でき喜ばしく思う。



首都サンマリノ市の歴史地区

●参考文献●
 小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典2』(小学館 2006) マンリオ・カデロ/加瀬英明『神道が世界を救う』(勉誠出版 2018)
 (取材/おおばりか、高柳由紀子 文/おおばりか)

麻布 未来写真館

麻布の坂

2007年からスタートした『ザ・AZABU』も50号を迎えた。このコーナーは24号からその歩みを共にし、これまで20の坂と3つの場所を巡ってきた。今号はその足跡を振り返りながら印象に残った坂を幾つか紹介したい。

坂を廻る

港区のホームページによれば、麻布には名前のあるものだけでも42の坂がある。名前の無い坂も入れればその数は優に50を超えてくるのではないだろうか。このコーナーでは足掛け6年、まだ半分も廻っていないのだ。これからも「麻布の坂」を廻り、多くの埋もれた物語を掘り起こしていきたい。麻布の魅力は尽きない。

時代は巡る

このコーナーがスタートした2013年には大きな出来事があった。2020年東京オリンピック開催の決定だ。奇しくもそのタイミングにスペイン大使館と仙台坂取材したことから1つの偶然を発見した。下記表をご覧ください。ここでは割愛するが、「400年の時を巡って」それは2011(平成23)年の東日本大震災の時から、オリンピック選考の時から、紡がれる「運命の糸」の様なものを感じざるを得なかった。あれから6年、幾多の嵐を乗り越えてオリンピックが来年、いよいよ東京で開催される。

このタイミングだからこそ敢えて言わせていただきたい。是非25号P.4「大使を訪ねて」、26号P.6「麻布の軌跡」を読み返して欲しい、と。巡ってきた時を「今度こそ乗り越えて」と期待を込めて。

1611年	陸奥慶長地震(M8.1)	2011年	東日本大震災(M9.0)
1613年	慶長遣欧使節が石巻を出航	2013年	東京五輪招致決定
1620年	慶長遣欧使節(支倉常長)帰国	2020年	東京五輪開催



坂かるた

東京都港区に広がる坂にまつわるカルタ。今はない坂や、坂ではない坂など92の絵札と句札による構成。その坂の名前から、江戸時代の古地図と現在のマップを見比べてみるのも一興。
(坂かるたの制作・販売は、港区観光協会加盟団体・NPO法人「あざ六プラス」 <https://www.aza6plus.net/>)

「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、地域への共感や愛着を深めていただくため、麻布地区の歴史やまちの移り変わりを記録、保存、継承する活動を行っています。

麻布地区の定点写真の撮影、昔の写真の収集等については、港区在住、在勤、在学者で構成された区民参画組織「麻布を語る会 麻布未来写真館分科会」が主体となって活動しています。まちの歴史や文化を多くの方々を知っていただけるよう収集した写真をパネルとして港区ホームページや展示会で紹介していますのでぜひご覧ください。



南部坂 [No.46]

【標高】〈坂上〉27.2m 〈坂下〉13.5m

今でこそ国際色豊かな場所でありながら、「武家の縁」を感じさせる南部家、蒲生家、浅野家にまつわるエピソードを発見した坂であり、古今のギャップが大きな印象を与えてくれた。



丹波谷坂 [No.36]

【標高】〈坂上〉29.8m 〈坂下〉16.1m

坂名の由来を探して、思いがけない人物やエピソードが登場することになった坂。戦国時代から明治時代、引いては現代までその系譜を垣間見ることができたことはとても印象深かった。



一本松坂 [No.40]

【標高】〈坂上〉26.8m 〈坂下〉23m

清和源氏の始祖となる源経基によるエピソードが坂名の由来になっている非常に古くから存在したであろう坂。この周辺にはまだ多くの物語が埋もれているように感じた場所でもあった。



掲載の坂の標高は「標高表示」というアプリを使用。標高表記についての詳細は次回の「麻布未来写真館」で紹介予定。昭和時代の写真は南部坂と丹波谷坂は、撮影：田口政典氏、提供：田口重久氏。一本松坂は、提供：港区立郷土歴史館。

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています！

明治から昭和にかけての麻布地区の建物や風景、お祭りなどの写真を募集しています。詳しくは、港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当までご連絡ください。

お問合せ 電話：03-5114-8812

港区麻布地区総合支所だより



麻布地区
地域事業

「ルール違反ゼロの六本木へ」 合い言葉は ZERO ROPPONGI ~六本木安全安心憲章~

ルールがあるから自由がある。たくさんの人と文化が集う六本木で、すべての人が自由に、楽しく過ごせるように。



ルール違反ゼロの六本木へ
合い言葉は、ZERO ROPPONGI

「清掃・啓発活動」と「客引き防止パトロール」を主なテーマとして、町会・自治会、商店会、事業者、関係行政機関の皆さんとキャンペーン活動を行っています。

活動に興味のある人は、お気軽にお問い合わせください。

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話／03-5114-8802

憲章に賛同する店舗・事業所を募集しています。

区では、憲章を周知する一環として、港区「六本木安全安心憲章」推奨事業所等認証制度を実施し、憲章の趣旨に賛同する事業所等を随時募集しています。

対象 六本木地区(六本木3~7丁目、赤坂9丁目7番)に主として立地または活動する事業所等

申し込み 直接または郵送で、賛同書に必要事項を明記の上、麻布地区総合支所協働推進課へ。また、以下の港区ホームページでも可。
※「賛同事業所等」として、名称を港区ホームページや本紙に掲載します。

賛同書の申請フォームは、こちらから

港区ホームページ <http://www.city.minato.tokyo.jp/>

六本木安全安心憲章

検索



麻布地区
地域事業

麻布未来写真館 パネル展を開催します！

麻布地区総合支所では、区民とともに麻布の昔の写真の収集、現在の風景写真の撮影を行っています。このたび、麻布地区の今と昔を広く紹介することにより地域への愛着を深めていただくため、以下のとおりパネル展を開催します。



◆港区役所1階ロビー

日程 ①2020年1月21日(火)~1月28日(火)
午前9時~午後5時
※土曜、日曜、祝日休み
※最終日のみ午後4時まで

場所 港区役所1階ロビー(芝公園1-5-25)

◆フジフィルムスクエア ミニギャラリー

日程 2020年1月31日(金)~2月13日(木)
午前10時~午後7時

※最終日のみ午後4時まで ※入館は終了10分前
※やむを得ず休館や、営業時間の変更をさせていただく場合がございます。

会場 フジフィルムスクエア ミニギャラリー
(港区赤坂9-7-3[東京ミッドタウン])

お問合せ／麻布地区総合支所協働推進課地区政策担当 電話／03-5114-8812

写真撮影がお好きな方、
麻布の歴史に興味のある方、
地域への愛着を深めたい方など、
ぜひお気軽に
お問合せください。



港区ホームページ

麻布地区
地域事業

【麻布地区地域サロン事業】

“ちょこっと立ち寄りカフェ”にお越しください

麻布地区総合支所では、地域の高齢者の皆さんが気軽に立ち寄って楽しく交流できる場所として、「ちょこっと立ち寄りカフェ」を開催しています。どなたでも気楽な雰囲気でお茶やコーヒーを飲みながら、おしゃべりや季節のイベントなどを楽しんでいただけます。毎月、麻布地区のいきいきプラザ4館で開催しています。ぜひ、ちょこっと立ち寄ってみてください。地域のボランティアも皆さんのお越しをお待ちしています。

会場及び内容(予定)

※プログラムは変更することがありますのでご了承ください。
イベント、講座、ゲームなどを行っています。



◆飯倉いきいきプラザ 東麻布2-16-11	◆西麻布いきいきプラザ 西麻布2-13-3
1/8 (水) 新年お楽しみゲーム会 3/4 (水) プラチナ美容塾	1/16 (木) 新春落語 3/19 (木) 春のお楽しみ会
◆ありすいきいきプラザ 南麻布4-6-7	◆南麻布いきいきプラザ 南麻布1-5-26
1/9 (木) 新春手品 3/12(木) さわやかレディース 手作りコンサート	1/22 (水) 南麻布の今昔を写真で見る 3/19 (水) AKYコンサート

時間 毎回午後1時30分から午後3時30分まで

対象 どなたでも

参加費 100円(茶菓子代含む)

申込み 不要です。直接会場にお越しください。

お問合せ／麻布地区総合支所区民課保健福祉係 電話／03-5114-8822

都税事務所からのお知らせ

12月は固定資産税・都市計画税 第3期分の納期です(23区内)

12月27日(金)までに、納付書裏面に記載されている金融機関、コンビニエンスストア等でお納めください。納税には、安心して便利な口座振替をご利用ください。パソコン・スマートフォン等からクレジットカードでも納付できます。詳細は、HPまたは下記問合先へ

お問合せ／【課税】【納税】 港都税事務所
電話／03-5549-3800 (代表)

【口座振替】主税局徴収部納税推進課

電話／03-3252-0955

令和元年10月1日から自動車の税金が変わりました

「自動車取得税」が廃止され、「自動車税環境性能割」が導入されました

- (1) 税率は燃費基準達成度等に応じて決定し、新車、中古車を問わず、非課税、1%、2%及び3%の4段階を基本とします(営業車、軽自動車の税率は2%が上限です)。
- (2) 令和元年10月1日から令和2年9月30日までの間に取得した「自家用乗用車」については、自動車税環境性能割の税率が1%軽減されます。

「自動車税種別割」の税率が引き下げられました

- (1) 現行の自動車税の名称が、「自動車税種別割」に変わりました。制度は現行と同様です。
- (2) 令和元年10月1日以降に初回新規登録を受けた「自家用乗用車」については、恒久的に自動車税種別割の税額が引き下げられます。

お問合せ／東京都自動車税コールセンター
電話／03-3525-4066

買い物
するなら
地元の
商店街で

ザ・AZABUへの
ご意見・ご要望を
お寄せください

住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当へ。

●電話／03-5114-8812 ●FAX／03-3583-3782

地域情報紙「ザ・AZABU」は
ホームページからも
ご覧になれます。



「ザ・AZABU」は英語版も発行しています。

ザ・AZABU

●配布設置場所のご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番、赤羽橋の各地下鉄の駅、ちいばす車内、みなと図書館、麻布図書館、南麻布・ありす・麻布・西麻布・飯倉のいきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Staff

出石 供子	田中 亜紀
おおばまりか	田中 康寛
大村 公美子	西森 瑞穂
加生 武秀	畑中 みな子
加生 美佐保	堀内 明子
小池 澄枝	堀内 實三
Mai S.	堀切 道子
染谷 正弘	八巻 綾子
田岡 恵美	山田 はるみ
高柳 由紀子	米沢 恵美

編集後記

「50号って、単なる通過点よね」と、若干冷めた心持ちでした。が、いよいよ50号を迎え、感慨に満ちた仲間の原稿を読むと胸が熱くなりました。私事ですが校了直前に旅行で広島を訪れ、そこで10本近い「被爆樹木」に向き合いました。32号の表紙「山の手大空襲で被災した善福寺のイチョウ」を担当・調査の折、広島市の爆心地付近には被爆しながらも生き残ったイチョウ等の木があることを知り、ずっと気になっていたのです。麻布を深く知ることが、年数を経て旅先での醍醐味につながりました。(大村公美子)

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします!

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。
年中無休/午前7:00~午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話／03-5472-3710 FAX／03-5777-8752

お問合せフォーム／<https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form.html>

“Minato Call” information service
Minato call is a city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752;
Inquiry submission form: <https://www.city.minato.tokyo.jp/kouchou/kuse/kocho/iken/form-inquiry.html>